犬が大好きなので、犬を飼っている人の気持ちが知りたくてこの本を選びました。捨てられた犬たちが処分されてしまうのはとてもかわいそうだと思ったので、飼い主の皆さんは、犬にちゃんとしつけをして、最後までかわいがってほしいと思います。

小学校高学年の部　最優秀賞

「犬たちをおくる日」を読んで

髙橋　玲（れい）さん
（志津川小学校４年　㊟蒲の沢）

何かが燃えている。

すさまじい炎の中にあるのは、山のようなごみだろうか。何だろう。

ようく見ると、動物の足が見える。犬だ。なぜ、犬たちは燃やされなければいけないのだろうか。しょうきゃくろで焼かれる犬の写真を見て、むねがどきっとして、ショックを受けた。

私は犬が大好きだ。しっぽをふって私の所へ来た犬をだきしめた時、その体のあたたかさを感じて私の心はいやされる。こんなにかわいい犬をかん単に捨てたり、犬をお金にかえたりする人がいること、また、犬をしょぶんしたり守ったりする人もいることを、この本を読んで初めて知った。

今までいっしょにくらしていたかい主が、「しつけができない、手におえない、旅行ができない、かわいくない」などの理由で犬を捨てる。きっと捨てられた犬は、「ここは、どこ？置いていかないで。むかえに来て。ずっと待っているから。」と、言っていると思う。最後の最後までかい主を信じているだろうに、人間はなんてひどいのだろう。

犬たちは、ステンレスせいの箱に入れられ、二さんかたんそガスを流してしょ分される。愛媛県動物愛護センターでは、犬を集め、しょ分し、しょうきゃくするまでを、ボタン一つで行うそうだ。まるで、ごみのしょ理場のように…。

私は、犬たちが殺される所を読んで、「何で？何も悪いことしていないのに…。一番好きなかい主に見捨てられた悲しみを考えてあげて。むだな命なんてないのに。」と、とてもつらくなった。

「いらなくなったから、捨てる。」という人間の勝手な行動に、私ははらが立った。そして。はっと思ったことがある。それは、犬の命をごみのように考えて捨てる人間がいることだ。犬の命をまるでごみのようにあつかっている。ごみのような、むだな命なんてあるのだろうか。

本の表紙に「この命、はいになるために生まれてきたんじゃない」と書いてある。犬たちが悪いのだろうか。前に、大阪で二人の子どもが置きざりにされて死んでしまったニュースを見たことがある。小さい子どもは、何も悪くないのに…。動物も人間も同じ。むだな命なんてない。「かいたい。ほしい。」ではなく、「かえる。最後まで責任を持てる。」ということが一番ひつようだと、この本から教えられた。

私は何度か、「犬かいたい。かって。」と、家族におねがいしたことがある。いつも返事は、「だめ、かえない。」だった。私が、「ちゃんとお世話するから。」と言っても、「生き物だよ。毎日、さんぽにつれて行くんだよ。」「だれかがやってくれるでは、ないんだよ。」「人間と同じ命があるんだよ。」などと言われていた。

今、この本を読んで、かん単に命をあずかれないと思った。「命をむだにしてはいけない。命は最後まで。と思うようになった。私は、自分の命だけでなく、全ての命を大切にすることを考えさせられた。

書　名…「犬たちをおくる日」
著者名…今西乃子／作
出版社…金の星社

平成22年度 南三陸町読書感想文コンクール

まさか、最優秀賞に選ばれるとは思っていなかったので、とてもうれしいです。
読書感想文は、原稿用紙５枚分を提出しなくてはならないので書くのが大変でしたが、苦労したかいがあったと思います。

中学校の部　最優秀賞

山椒魚（さんしょううお）

三浦壮馬（そうま）さん
（志津川中学校１年　㊟天王山）

山椒魚を初めて読んだ時、正直言ってまったく意味がわからないというのが最初に思ったことでした。この作品の内容はかなり難しいなとも思いました。意味がわからないことがくやしく、何度も何度も読みなおすことでだんだん内容がわかってきました。

ところで、読んでいる途中で、自分は山椒魚をテレビでしか見たことがないような気がしました。実際に見たことがあるのかどうか母に聞いてみました。すると、どうやら自分が幼いころに、モーランド本吉で見たことがあるらしいです。まったく記憶にないのですがこの作品に、少し親近感をもちました。

山椒魚は自分の棲家の中で成長するうち、頭がひっかかって外に出られなくなり、毎日棲家の外のけしきを頭だけ出してながめるという悲しい生活を送っていました。そんな日々が続くせいで、とうとう自分のことを生きる価値のない、ブリキの切りくずだと思うほどになってしまいます。ある日、棲家の外で自由に泳ぎまわって見せ、自分をうらやましがらせたかえるに腹を立てます。山椒魚は自分と同じ棲家の中にかえるを閉じこめて、かえるを自分と同じように自由に泳げないようにしてしまいます。そうして彼らは一年間も口論をし続けました。その次の一年は互いに黙り込み、自分の嘆きが聞こえないようにしていた、という悲しい話でした。

一番悲しいなと思ったところは自分の棲家から出られなくなってしまうというところです。なぜなら、誰だって自分の家からずっと出られなくなったら、いやでしょう。もちろん、自分もいやです。山椒魚はさぞかし悲しかっただろうし、なんで自分だけ棲家から出られないんだろうと思ったことでしょう。

共感したところは、山椒魚が自分の棲家にかえるを閉じこめてしまうというところです。もしも自分が山椒魚だったとしても、自分が家から出られなくなっているときに外で自由にかえるが泳ぎまわっていたら、やっぱり同じことをしていたなと思ったからです。あまりの悔しさに思わずかえるを閉じこめる。誰にでも思いあたる心境です。

一番心に残っているセリフは「ああ神様！あなたはなさけないことをなさいます。たった二年間ほど私がうっかりしていたのに、その罰として、一生涯この窖（あなぐら）に私を閉じこめてしまうとは乱暴であります。私は今にも気が狂いそうです。」というところです。山椒魚が何度も何度も棲家から出ようと必死になっているのに出られなくて、山椒魚の目から涙が流れたとき、思わず自分も泣きそうになってしまいました。悪気はなかった山椒魚に同情し、とてもかわいそうに感じました。うっかりしていたことは自業自得だったとしても、これほどの仕打ちをうけるのはあんまりではないかと思いました。いつしか、山椒魚に自分を重ねて読んでいました。

この「山椒魚」という作品は、山椒魚のこっけいな姿を描いた喜劇ではなく、山椒魚の姿を借りておろかさやみじめさを描いた悲劇だったのではないかと思いました。作者は、山椒魚が棲家から出られなくなった悲しみや、かえるが外で自由に泳ぎまわっていることへの怒り、そして他の誰だったとしても、誰でもがそうするだろうという心理を、描きたかったのではないかと思います。

この作品は、軽はずみな自分の言動を後悔する日々が、描かれていますが、これは自分達人間に対する戒めではないかと思います。人は、悲しいときや、ひどく悔しい思いをしたときに、思わず誰かのせいにしたり、誰かを恨んだりしてしまいがちです。そういう、人が持つ弱さや醜さ、おろかしさが描かれた作品でした。自分も、つらい気持ちにおしつぶされて、他の人をまきこんだりすることのないようにしなければ、と思いました。自分の姿を振り返り、弱さに気づくきっかけをくれた作品でした。

書　名…「山椒魚」
著者名…井伏鱒二／著
出版社…講談社